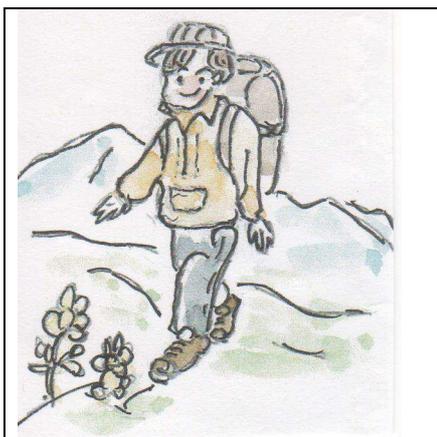

一部50円です

遠い宝塚



せまい山道を次から次へと人が抜き去っていく。昨夜、西宮の玉井さま宅でご馳走になり体調も良いのだがついて歩けない。ここは六甲山縦走路、菊水山の急な登り場である。須磨浦公園から宝塚まで56キロを歩く序の口の山である。これから、鍋蓋、摩耶山などいくつもの山を越えていかなければ宝塚にはたどり着けない。

毎年参加している友人の麻田さんに刺激を受け、一年がかりでトレーニングをし、ここ3ヶ月、毎週のように六甲山に通い身体を山にならしてきた。病み上がりとはいえ、何とか歩き続けることができると思い参加したのである。

途中で検問所があって通過時間が決められている。遅くなれば先には進めない。途中棄権となるのである。ぎりぎりでも完走したい。

最初のチェックポイントを何とかクリアして、市が原に下りて摩耶山に登り返す。つぎのポイントの制限時間に余裕がなく休憩なしで歩く。六甲最高峰の検問所に着いたのは5時前である。ゴールの制限時間も迫ってきているので歩き続ける。それからが長かった。単調な山道をライトで照らしながら歩くが宝塚の街の灯が、なかなか見えてこない。いつもなら3時間もかからず歩けたのに…。

9時にゴールに着いた。制限時間の30分前だ。冷えた身体に熱いお汁粉が美味い。そこから宝塚駅までよちよち歩きで1時間もかかった。コンビニで缶ビールを買って麻田さんと祝盃をあげる。「ありがとう！キミのおかげで完走できた。来年はもう少し早く歩きたい」忘れていた辛くて苦しい冬山合宿の下山した時のなんとも言えない疲労感と達成感を思い出した。もうやめられない。こんな楽しい事を見逃す事はできない。がむしゃらには登れないが、自分の身体と対話しながら歩きたい。兵庫県勤労者山岳連盟様お世話になりました。

死をめぐるあれやこれ(9)

石川 吾郎

夜の爪

夜に爪を切ると親の死に目に会えない、というのは誰が言い出したことなのだろう。少なくとも私の幼いころ故郷の岐阜ではこのような言い伝えがあり、私は幾度も聞かされていた。うっかり晩ご飯の後に爪を切ろうとすると、親や兄弟などの家人からそれを言われて、そそくさと爪切りを引き出しにしまい込んだのを覚えている。「親の死に目に会えない」というのが、とてつもなく恐ろしいことで、これ以上ない親不孝なことなのだと、私の意識の中にすり込まれていたのだと思う。

大学に入って故郷の岐阜を離れ、以降は関西で大学生活をおくり、そこで就職、結婚、子供もでき、故郷で暮らすことはもう三十年以上なかった。親たちは相変わらず住み慣れた古い家に住み続け、母親は認知症になり介護が必要になったが、それでもその家に住むことにこだわった。三人の子供は親とともに住むということはなく、私が週末に帰るといことが何年か続いた。しっかりとっていた父親があっけなく亡くなり、何年かたって、寝たきりになっていた母親もその家で亡くなった。そのいずれの時も、私は死に目に会えなかった。そして私は自分に対してそれを責めていた。その後何年か経った今、改めて「親の死に目に会う」のが何なのだ、と試みてみる。

しかし相変わらず今でも、私は夜に爪を切ることができない。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
死をめぐるあれやこれ	石川吾郎	1
闘病記 25	梵店主	2
おっちょこちょいぼけ 25	A O	3
東北ボランティアに参加して	麻田育良	4
世界一周旅行記 11	若山哲郎	4
大人の今昔物語 9	石川吾郎	6
素老人・よもだ帳 13	坂本一光	8
哲学屋のつぶやき 10	祖蔵哲	9
花盗人のうらおもて 3	大江雅鬼	10
女90年の軌跡	眞純	12
俳句	土田裕	12

闘病記 25

迷走の世界

梵店主

まさか、まつおかはんより先に死ぬことはないだろう、とは思うが何ともわからない。よっちゃん、あてどのない病状をわきに置いてまつおか先生の葬式の事を考え始めた。

先生のつれあいが亡くなるときも、先生は「わしは、ようわからんからたのむわな」と看病疲れでなげやりになりながらもよっちゃんや片山君にいつも言っていた。

癌をわずらっていたつれあいは、二年あまりで亡くなった。その時は、深夜、葬儀屋が明朝七時に来ると先生から連絡を受け、五時過ぎに車を飛ばして先生宅に行った。すぐに片山君も来てくれた。

片山君は、ほんとうに先生の面倒見がよく、暇さえあれば家に行き世話をし続けていた奴である。片山君がいなければよっちゃんも、まつおかはんとこれほど親密につきあつてこれたかわからない。片山君とは幼いころからの友達だから互いの気心はよくわかつているが、葬儀となればよく話し合っておかなければならない。

先生は待っていた。先生が金はあるから好きなようにやってくれと言う。すかさず片山君が「よっちゃんよ、先生はそない言うとしてやけど、これからも金はあるんやから。あんまりつこたらあかんよ」

半分寝ぼけたような先生をみて、こりやあかん。わしがやらな、と思ったよっちゃんは、とっさに「先生、葬儀屋が来たら私がすべて相手をします。先生はそばに座って私の言うことに同意するだけにしてよ。葬儀代は五十万でします。ええやる先生「わかつたきみらの言うとおりにする」と先生は言った。

葬儀屋は七時に二人きた。挨拶をして見積もり用紙をとりだし書き始めた。よっちゃんが「はじめに断っておきたいこ

とがあります。私が先生に代わって葬儀の打ち合わせをさせていただきます。なお葬儀の予算は五十万です」と言う。葬儀屋は態度を一変させた。「そんな予算ではできません」「そうですか、できないのなら仕方ありませんお帰り下さい」

葬儀屋はよっちゃんの無鉄砲ともいえる切り出し文句に怒るかと思つたが「あなたは、どういう方なんですか」と聞いてきた。よっちゃんは「じつは、わたしは小学校の教子なんです。先生はわたしの恩師です。先生は金があると申しておられますが、これからの生活もありませんから葬儀にうん百万も使つたらどうなりますか？。私は、葬儀に関して素人ですが私の言う通りに入れていただければ五十万でできます」と答えた。

すると、葬儀屋は態度をかえて「わかりました。言われるように見積もっていきます。お聞かせください」

よっちゃんは、この葬儀屋の主任はできる奴だと直感した。できる奴だと見込んで話をつづけた。「私はない商売人ですが、無理を言うつもりはありません。ただ、商売人の勘でいたい五十万ぐらいで収まるはずですよ」と前置きして具体的な交渉に入った。

最小限度に切り詰めた注文をし終えて、よっちゃんは「合計でいくらになりますか」と聞いた。主任は「五十八万です。積み立てを二十万あまりしていただいで

おりますから、追い金は二十八万足らずかと」「はい、それでお願いします」

よっちゃんは、ほっとした。この金額なら文句は言えない。先生を見ると何ともいえぬ顔であった。足りないところは自分たちでやればいいのかと自信がわいてきた。すると、主任はサーブिसで御通夜のための納棺と式台をさせていただきます、と申し出てくれた。ありがたい厚意はすべて受けることにした。

翌日の朝、先生宅へ早く行くと、もう主任が来て霊柩車を掃除していた。その姿を見ながら、よっちゃんは、やっぱり主任はデキル。昨日の打ち合わせでは、主任は、今日は休みだと言っていたが、わざわざ休日出勤してきたのだ。そんな事を想像すると胸があつくってきた。そんな言葉を交わすこともなく葬儀の準備をする。よっちゃんが司会をすることにした。先生は自然葬を希望されているから、読経がない。時間を稼ぐために幾人かの参列者に弔辞や音楽などをお願いしなければならぬ。年賀状を見ながら先生の話を聞き、めばしいと思われる人に連絡をする。

運よく一時から二時まで葬儀場が空いていた。納棺の時間が十五分かかるので、四十五分間で喪主の挨拶や献花、弔辞などを臨機応変にやらねばならない。はたして幾人の参列者があるのだろうか。

信長様と三河人と私…の巻

仕事で愛知県の西尾市というところへ行く。そんな市があることさえ知らなかったが、愛知といえば尾張名古屋ではないか。依然として織田信長に恋している私は「信長様の郷里だ！」とゴキゲンだったのだが、現地の人にあつさり否定された。「この辺は三河だから。信長ではない。家康。家康が生まれた岡崎城が近くにある」。

そうなのか、とがっかりしたが（私が無知なだけ）、一応「あ、ご存知だと思いますが、家康は信長の舎弟みたいなもので…」と言ってみる。家康が子供のころ、信長の家（城か？）で人質生活をしているし、今川義元亡きあととは同盟関係で結ばれている。家康にとつて、終生「殿」とは信長のことだ。ま、こんなこと、小学生でも知っているから、三河の民が私の言葉に感動して、「そうだった！ この辺は信長様のゆかりの地だった」とは言ってくれなかったが、それでも仕事で大阪からやって来たオバハンに敬意を払おうとして、「信長が好きなんですか？」と聞いてくれた。いわゆる、社交辞令ってやっだ。

仕事が終わって、みんなで食事会、という席。既に、ビール飲んで、もう一回ビール飲んで、赤ワイン飲んで、そのお

かわりも飲んで、いつのまにか白ワインを注いでもらって飲んでいるという「ほろ酔い」状態。私としたら、尾張の（三河だったけど）人たちと、信長談義で大いに盛り上がって、ひよつとしたら、「オレの先祖、織田信長の十男なんですよ（子供が最低でも二十人はいたらしいから）」なんて嬉しいことを言い出す人がいて、その人は、スケートの信成には全然、似ていなくて、どことなく武将っぽい精悍な顔立ちで、「大阪の人は秀吉がひいきかと思っていたのに、嬉しいな。そうだ、家に織田家伝来の旗指物があるので、よかつたらあげますよ！」なんてことには絶対ならぬとさすがに思うけれど、妄想はタダである。

イイ年して、何が信長様だよ！と思う人もいるかもしれないから、言うておくが、私は「信長様より四百十九歳年下」なのである。よく、年の差婚なんて芸能人がいつているが、せいぜい三十とか四十である。私は信長様よりめっちゃ若いのだ！と友だちに自慢していたら、その友だちは「信長って確か、四十九歳で死んでるやろ。アンタ、いくつ年上？」。えええっ！そういう計算？ それだと、私の誕生日がくるたびに、私と信長様の年の差は開いていくではないか。私が百歳になっても、信長様は四十九歳のままなんだから。

「で、いつから、信長が好きなんですか？」と社交辞令が続く。みんな、やさしいな。酒飲んでると、この世は愛であ

ふれている、という気持ちになる。「一年半ほど前かなあ？ 二年ほどだったかなあ？」（かなり酩酊しているから、思い出せない）。

そしたら、どうでしょう！「みじかつ」「ペラっ」だと。三河の民に完べきバカにされてるやん。

私が、この短い年月に、どれだけの情熱と時間を信長様のために費やしたか、三河人は知らないのだ。安土城（城跡だけ）にも行きました。信長様からみで読んだ本はもはや数え切れず。「信長公記」（しんちょうこうき、と読みます）は、信長の側近だった人が書いた当時の記録で、「信長私記」は花村萬月の小説で、ポルノチックなところがなかなかなかなかで、最近読んだなかでは、「火天の城」（山本兼一）が非常に面白く…と語ればキリがないのである。

そうそう、本能寺の変で信長を討った明智光秀の子孫、明智憲三郎さんにも会った。「会った」というと、いかにもだが、実際は本屋の二階で開かれた講演会に行つて、著書にサインしてもらつて、一緒に写真に写ってもらつた、というだけなのだが。私の場合、「光秀様もいよいよなあ」という、ワケのわからない博愛主義者（戦国ミスター）なので、舞い上がってしまった。

憲三郎さんは本能寺の変が起きたのは、信長が家康を亡き者にしようとしていたために、あのような状況が「お膳立て」された、もちろん、背景に四国討伐があ

り、それを光秀は阻止したかった、という論で、それはそれで面白かったが、個人的には明治時代まで、明智家の人たちは「明田」と名乗っていた、という話が印象に残った。主を討つた、謀反人の末裔というのは、二百年以上、苗字を変えてまで隠すべきことだったらしい。最も、光秀が統治していた丹後の人たちは、「明智の殿様は名君だった」と言い続けているそうだが。

三河の民にバカにされただけで、せつかく尾張（の隣）まで行つたのに、何の収穫もなかった私。旗指物が欲しい。刀はいらない。危ないから。鎧、兜もいらない。怖いから。旗指物も、敵の側の人たちを震撼させたはずだから、本来「まがましい」ものなのかもしれないが、現物が風になびくところを見てみたい。いつでも見ることができるよう、できれば一本、所有したい（はためかせる場所がないのが問題だが）。

そういう所有欲をほんの少し、なだめてくれるものを安土の土産もの屋で買ってきた。織田家の家紋、木瓜紋入りのぐい飲み、湯のみ、マグカップ、旗指物風の手拭（濃い黄色の地に「永楽通寶」と染め抜かれている）等々。

安土に行かなくても、信長様グッズ（子供だましみたいなのだが）は大阪市内でも買える。自慢ではないが、扇子やペン、メモ帳などと結構たくさん持っている。自慢するより、恥ずかしがれや、と自分でも思うけど。

東北ボランティアに参加して

麻田青良

二〇一四年十月三十一日夜十一日
四日まで京都勤労者山岳連盟の東北ボランティアに参加した。メンバー五人でワゴンで夜十一時ごろ出発し、石巻市に七時すぎに到着した。

しばらく宿泊場所の公民館でお世話になる〇さんが来られるまで待った。来られて予定の打ち合わせをし、今日は被災地見学になる。〇さんの案内で石巻市内、女川町、南三陸町、牡鹿半島などを見て回った。石巻港の周辺はガレキが撤去され敷地のみ残っている。門脇小学校も校舎の建物は残っており、震災遺物で残すか検討中のような。

三月に労山隊が花壇を作っており、各県の名札も立っていた。このあたりは震災公園になるようだ。大川小学校も訪れた。りっぱな石碑の慰霊塔が建っており、亡くなった児童の名前が全員書かれていた。近くの村人の名前も書かれており、昼間だったので多くは老人だったようだ。小学校校舎も残される方向だそうだ。

女川町、南三陸町は大規模に土盛り工事がされてきており、10m近くはかさ上げされ建物を建てるようだ。南三陸町の防災庁舎は残すか検討中とか。我々は残してほしいが、被災された人は複雑だろうと思う。石巻市は町が大きいので復興の進み具合は小さい町のほうが早いようだ。

二日目はお世話になって石巻市水沼地域の共同作業の手伝いでアジサイを植樹する準備の竹くい設置と植える場所を掘った。その時村の小さな川に遡上しているサケを身近に見て感激した。産卵しようとするものもいた。サケを採るのはいけないようだ。

三日目は金華山方面の潮風トレイルの作業予定が強風で船が出ず中止になり、〇さんの畑のショウガの収穫を手伝う。御礼に新ショウガや米を一袋もいただき、京都労山交流会で活用した。四日目は福島の見学で一年ぶりだ。

南相馬市の道の駅で地元宮城労山のIさんと合流し、案内で浪江駅に行く。途中除染作業で田んぼの土を削っている光景を見た。この作業は地元の人が優先的に仕事保障でやっていると言明があった。一日九千円程度だそうだが、汚染されて危険な作業をせざるをえない人々の気持ちは複雑だろうと思った。駅の広場にはバスが数台置かれたままになっていった。放射線量が高いので使えないらしい。駅前の新聞店にはガラス越しに震災当日、翌日の新聞が配られずにそのまま積まれたままになっていた。

持ってきた線量計は一・四二マイクロシーベルト毎時を示した。近くに設置された線量計は半分ぐらいの数値だった。彼の話では地元の人には設置された線量計はあてにならないと思っているとされた。昨年行った時も他の場所と同じように低い数値を示していた。

請戸港や請戸小学校も訪れた。近くに黒いフレコンが何百個も置かれていた。除染された土などの仮置場になっているようだ。学校の校舎内にも入ったが、昨年よりも整理されており、黒板には訪れた人がメッセージを書いていた。被ばくした牛を飼っておられる希望の牧場も行った。昨年も行ったが、この牧場をもとにした絵本ができており買ってきた。牧場主の吉沢さんは少し疲れた感じだったが、福島を日本の棄民にさせないよう全国をまわりたいと言われた。

国道に戻り、ここでIさんと別れ最近開通した国道六号線を南下する。途中第一原発のすぐ近くを通過した(二・五キロ)が、持っていた線量計が九・九六三マイクロシーベルト毎時(八・七ミリシーベルト毎時)と限界近くの数値を示したのでビックリして早くここから逃げようと思った。

国道脇にスクリーニング場と言うところがあり、除染を水か何かでするらしい。余りやっている車は少ない。我々もやっていない。常磐道、磐越道、北陸道、名神を乗り継いで二二時三〇分ぐらいに京都に着いた。今年も東北に行き、復興は少しずつ進んできているが、我々が支える事が進める力になると思った。原発被害は深刻だし、放置されてはますますひどくなる。次は我が身と思いい、原発のない社会が早く実現できるように福島と向き合っていきたい。

世界一周旅行記 11

若山哲郎

世界の最果てに行く

一月一二日私たちの船はウルグアイの首都モンテビデオに寄港しました。ブエノスアイレスからわずか一日。日本の反対側にあるアルゼンチンやウルグアイなんて国は名前は知っていても何処にありどんな国なんてほとんど知りません。外国の方が日本て何処にあるのだから、中国のすぐそばだろなんて思われているのも当たり前なのかもしれません。昨日行ったブエノスアイレスもモンテビデオもプラタ川の河口にあるのです。と言うからプラタ川自体が巨大な湾なのです。だから一五一六年にスペインからの航海者ソリスもここがインド洋から太平洋への水路と信じていました。またマゼランももう少し南のマゼラン海峡を発見するまでここへ迷いこみました。そんなわけでこの船もまず奥地のベノスアイレスに行きここモンテビデオに引き返し寄港したのです。そしてプラタ川は比較的浅いので船は指定航路を通らねばならないため思いのほか時間がかかったのです。ウルグアイは南米で二番目に面積が小さな国ですがチリについて二番目に安定している国です。アルゼンチンと同じく移民国家でスペイン人が侵略してきた国です。一八二八年モンテビデオ条約によりアルゼンチンとブラジルから独立しました。当初は南米のスイスと言われ中立政策をとり経済も安定していました。

しかし大戦後は軍政などが繰り返され、新自由主義的な時代も経験し、現在はムヒカと言う非常にユニークな大統領になり国際的にもその政策で注目されています。ベネゼイラのチャペスのように極端な反米ではありませんが独自の政治哲学をもち自身は俸給の八〇パーセントを寄付し車はワーゲンという徹底ぶりでカールスマの人氣があります。そんなモンテビデオですがそれでもやはり治安は良くありません。今日は自由行動で市内バスに乗り美術館と日本庭園に行つて来たのですが少しメイン通りを外れると警官が来て危ないから戻れと言います。実際ツアーの人が盗難にあいました。その人もどうかと思うのですが腕時計を盗まれたそうで、ロレックスだとか。でも狙われても当たり前のような気がします。再三、外出時は高価なものには身につけないでと注意されていたのに。言葉はスペイン語オンリー。英語は通じません。こんな時最低必要な言葉は、いくら、どこ、トイレの三語だけ。これで市内を動きまわりました。さてここも独立広場があつたり

教会があつたりで、典型的な南米の移民国家の形。カソリック教会、独立広場、高級住宅地域、インディオとの混血階層。しかし人々は親切で陽気です。本日は日曜日、観光客相手の店や露店はやっていますがデパート、専門店などが集まるメインの繁華街、たとえば京都で言えば四条通りのような繁華街でも完全閉店。誰も通っていません。日本では考えられないくらい休むことは徹底しています。

さてウルグアイも1日滞在ですぐ船は出航しさらに南下しています。南下といつてもここは南半球なのでだんだんと寒くなつてきます。

一五一九年八月スペイン、セビリアを世界一周航路開拓のため出航したマゼランも大西洋を渡り太平洋に抜ける航路を見つめるべく南下しています。そしてついに一五二〇年十月その航路を通過します。彼の名前にちなんでつけられたのがマゼラン海峡です。航海技術も未熟な当時は暴風などの危険、栄養失調や病気などの不安、さらに乗組員の反乱など幾多の試練がありました。そのマゼラン海峡は通過せずに私たちの船はさらに南下し、ビッグル水道に入りました。

ビッグル水道というのは、南米大陸最南部とチリ、アルゼンチンが半分くらいの比率で領土としている南米最南端のフエゴ島との間の海峡でチャールス・ダーウィンが一八三〇年代にビッグル号で地球一周の調査のときの経路でした。名前はこの船に由来します。

一月一八日は私たちの船はそのビッグル水道の北岸、世界の最果ての街、ウシユアエアに上陸しました。日本の最北端は宗谷岬。これは日本人なら大抵知っています。では世界の最果て何処、私も知りませんがしかし果てというからにはスタート地点があるはず。看板には確かにスペイン語で「FIN DE MONDE」地球の果て」と書いてあります。

さてさて、話しは「ミトコンドリアイブ」から始まります。現生人類の起源は

DNAを遡ると全てアフリカのある地点にたどり着くという説があります。アフリカ単一起源説です。アファール猿人として発見されたその仲間のルーシはビッグルズの曲名からとられ有名になりましたね。また家族として移動した足跡も見られています。

人類はそれからアフリカを出てヨーロッパにユーラシアに行き当時陸続きだったベーリング海を渡り北米から南米のこの地にたどり着いたと言う壮大な歴史です。十六万年前の事です。観光センターにいくと、ここが最南端と言うことで宗谷岬でもらったのと同じような証明書をくれました。しかし、まだ南にあるナバリノ島の村プエルトウイリアムというところも世界の最果てと言っているらしいのです。ややこしいですがよくある話です。最古の人類は驚く事にこんな寒いところで裸で暮らしていたという記録があります。オットセイの油などを塗り防寒していたらしいのですが驚異です。

さてこの町ですが最果てだけあって昔は監獄の島として使われたようでその建物が博物館になっていました。典型的なパノプティコン作りになっています。すなわち一点で全てを監視し人を飼いならす方式。功利主義で有名なベンサムが考えました。同じく哲学者フーコーはこれが現代の支配方式であると言っています。ま、そんなに難しい話は置いておいて蟹を食べました。デカイ、多い。食べられません。満足でした。

ウシユアエアでは観光船に乗ってビー

グル水道の見物に行きました。シーライオンやペンギンの島の見学です。まあ、別に日本でのアシカ島観光とそれ程の違いはありませんでしたが。ただここが世界の最南端というだけです。あとこれは知らなかったのですが世界の果ての灯台なんでもかんでも果てですが。映画に出て有名になったような。普段海は荒れるらしいのですが今日は穏やかでした。遠くの山は雪が残りましたが南極に近いのだということを感じました。この島はマゼランによって火の島と名づけられたフェゴ島です。島の灯りが遠くから見えたこと。明日はいよいよ船はフィヨルド氷河を通ります。乞うご期待。

この旅も半分を過ぎてやつと後半部。少し前にマゼラン海峡とフォークランド諸島の間を通過した時からだんだんと寒くなってきました。と同時に海が荒れて船はローリングとピッチングを繰り返しています。テーブルの皿が傾きで落ちたりもします。私の部屋は比較的低層の三階なので波が窓に叩きつけられています。船酔いする人が続出しています。私一度もなりません。そんなに船酔いには強くないはずなのですが、やる事が多くありじつとしていないせいかも知れません。乗船前に、インド洋や喜望峰あたりは海が荒れるとは聞いていましたが少しは他より波が高かったのですがお陰様でたいしたことはありませんでした。大西洋なんかはもうずっと静かでした。しかしここからはビッグル水道に入るまでが本格的に揺れるのかも。どきどき。

石川吾郎

今回は今昔物語の中でも屈指の不思議な物語です。さっそく始めましょう。大人の危険な匂いの愛の物語で教科書には載せづらく、教科書に出ない度は五／五です。

人に知られぬ女盗賊の話

(巻二十九ノ三)

今は昔、どの帝のころであつたらうか。貴族に仕える侍の身分のもので、名前は不明であつたが、年の頃は三十ばかり。背丈はすらりと高く少し赤ひげの者がいた。

夕暮れ方にこの男、京のとある町を徒かで通り過ぎようとしたところ、路傍の家の窓辺からネズ鳴きをして手招きをする者がいる。男は近寄つて「お呼びになられたかな」と言うと、女の声で「お話し致したいことがございます。その戸は締め切つてあるように見えますが、押せば開きます。どうぞお入り下さいませ。」という。男、思い掛けぬこととは思つたが戸を押し開けて入った。

女、簾かこしに「その戸は、錠を掛けておいでなさい」と言うので、男は言われるままにして近寄ると、「お上がりなさいませ」の言葉に従い、上がった。さらに簾の中に呼び入れるので入つてみると、こぎれいに整えられた所に、服装もよく愛嬌ある顔立ちの二十歳ばかりの女がた

だ一人座り、ほほ笑みながらうなづくので、男はさらに近寄つていく。女がこれほどに仕掛けてくるのに、男としては据え膳を食わぬわけにはいかぬと、とうとう二人は共寝した。

この家には女以外だれもないので、男は「どんな家なんだ」といふが、一度關係をもつてしまうとこの女にすっかり魅せられ、日の暮れるのも気づかず共寝していたが、夕暮れになり、戸を叩く者がいる。人もいないので男が出て戸を開けると、使われる侍風の男二人と、宮仕への女房ふうの女が一人、下女をつれて入つてきた。窓を閉めたり火をおこしたり、なかなか立派な料理を銀の食器に盛り付けて、女にも男にも食べさせた。

男、「オレが入つて錠を差した。そのあと女は人に申し付けるようなこともなかつたのに、どうしてオレの食べ物までもつてきたんだらうか。もしや別の男でも居るんじゃないか」と考えたが、腹も減つていたので、よく食つた。女も男に遠慮もせず物を喰う様子は、堂に入つて居る。食事が終わると、女房ふうの女は後片付けをして出て行つてしまつた。その後、女は男に戸を締めさせ、また共寝した。

夜が明けてまた門を叩くものがある。男が開けてみると、昨夜のとは違う者たちが入つてきて、窓を開けそこそこを掃除する。しばらくすると、寝起きの粥と朝食の飯をもつてきて、それを給仕し、さらには昼食までもつてきて、それを食べさせ終つてまた皆出て行つた。

こんなふうには三日過ぎていると、女、「どこぞ、おでましになるところがお在りになります」と問うので、「少々知人のもとに行き、伝えたいことがある」と答える。「ならば、お早くおいでなさいまし」と。しばらくすると立派な馬に相應の鞍を置いて、水干すいかんを着た下男三人ばかりを、馬丁として連れてきた。また過ぎした部屋の後ろに、壺屋めいた所があつたが、そこらなかなか良い装束を取り出してきて男に着せる。男はそれを着て馬に乗り、従者を従えて出発する。この従者たちは、思い通りに動き、使いやすいく限りない。

さて帰つてくると、女が何も言うわけでないのに馬も従者も知らぬ間に姿を消している。食事も女が何を指図するわけでないのに、どこからともなく持つてきて、ただ同じようにする。

* *

こうするうちに、何一つ不足を感じることもなく二十日ばかりが過ぎていつた。女、男に言うに「思いもよらぬとりとめのない偶然のようですが、然るべくしてこのように立ち至つたものと存じます。さすれば、生きることも死すとも、これからわたくしの申し上げることを、よもや否とはおっしゃるまいな。男「今では生かすも殺すも、そなたの心しだいで」と答える。女「まあうれしや」と、食事をして片付けなどをする。

この家は昼の間は二人の外はだれもない。女「さあ、こちらへおいでなさい」

と男を離れの家に連れていく。そこで男の髪に繩を掛け、身体を幡物はたものという拷問道具にくくりつけ、着物を剥いで背中を出させ、足を曲げ縛りあげる。女は烏帽子を被り水干袴という男装で現れ、片肌を脱ぎムチを手に、男の背をしたたかに八十度打ち付けた。女「どんな具合だ」と問う。男「これしき何でもなし」と答える。女「やはりね。想像通りよ」と、止血効果のあると言われるかまどの土を湯に溶いたものを吞ませ、また良質の酢を吞ませる。土をよく払い寝かせて、二時間ばかり休ませ、状態が回復してくると、その後は普段より良い食事をもつてきた。

その後は懇ろに介抱し、三日ばかり過ぎて、背中のムチの傷がほぼ癒えたころ、また同じように男を幡物に縛り、前の傷の部分にムチ打つ。傷あとに沿つて血が走り肉が盛り上がるのをかまわず、八十度ムチ打つた。女「がまんできるか」と問うと、男いささかの動揺もせず「大丈夫」と答るので、今度は初めの時よりさらに感心し、さらによく介抱する。また四五日ほどして、また同じようにムチ打つが、これもまた同じように「へいちゃらだ」と男の言うので、今度は腹をムチ打つた。それでも尚「痛くも痒くもない」と男の言うので、女この上なく感じ入つて褒め、よくよく介抱をして何日間か過ぎた。ムチの傷が癒えたころになつて、さる夕暮れ、女黒い水干袴と立派な弓と矢入れ、脚絆に草鞋などを取りだしてきて、男に着せ、身支度をさせた。

そこで女の教えるには「ここから夢中たでなか

の御門に行つて、静かに弓の弦、うちをなさいませ。すると弦うちを返してきます。また口笛を吹くと口笛を返すものがきつと居ます。そこに近づくと『お前は誰だ』と尋ねてくる。このときはただ『参りました』とだけお答えなさい。連れられる所に行つて、言われるに従い、指示された場所に立つて、人などが出て来て妨害するのを防ぐのです。その後は船岡山のふもとに行き、戦利品を山分けするでしょうが、おまえさまにくれるというものを、決して何も受け取つてはなりません」と教え含めて、出発させた。

* * *

男、教えられた通りに行くと、その通りに呼び寄せられた。様子を見ると、同じような者たちが二十人ばかり立ち集まつている。この一団から少し離れて色白の小男が立っている。この男には皆がかしこまつている様子だ。その他に下男風の者が二三十人ばかり集まつている。そこで手筈を命令されると、皆が連れだつて京の町なかに入っていく。大きな家を襲おうと計画して、二十人ばかりの者をあちこちの厄介そうな家の門に二三人ずつ見張りに立て、残りの者は皆、目的の家に入つていった。頭は「この男を試してやろう」と考え、特に厄介そうな家の門の見張りに、この男を加えて立たせた。男は、そこから飛び出して来る者に弓を射て命中させたり、方々の戦いぶりに対して目配りもしつかりしていた。

さて略奪を終わつて船岡山のふもとま

でもどり、戦利品を分ける段になり、この男に分け前を与えようとすると、男「ワシは物はいりませぬ。ただ、このようなことを見習おうとしてまいつただけなので」と、受け取るうとしない。これを聞いて頭とおぼしき先ほどの小男、感心して目をつけていた。こうして三々五々解散していった。

男が、もとの家に帰つてくると、女は風呂を焚き、食事の準備をして待ち受けていた。風呂も食事も済むと、二人は共寝をして休んだ。この女、男を去りがたく愛しく思い、また男もこの盗賊の仕事を嫌だと思ふ気持ちもなかつた。そういうする間に、このようなことが七八度にもなつた。ある時には太刀をもつて家中まで押し入つた。またある時には、弓矢をもつて外に立つということもあつた。男はどの役目もみな、そつなくこなした。こうする内に、女はカギを一つ取り出し、男に言う。「これは、六角小路よりは北某通りよりは東の、しかじかという所に行くと、そこに蔵がいくつかありますが、その中のこれこれを開けて、これはどうしたものをよく荷造りして、その付近に車貸しが多くいるので、それを呼んで積んでもつておいでなさい。」

男は教わつたままに行つてみると、実際に蔵が並んでおり、その中で教えられた蔵を開けてみると、欲しいと思うものはすべて、この蔵の中にあつた。「何ということだ」と驚いて、言われたままに車に積んで運び、思うように取り出して使つていた。このようにして一二年が過ぎ

ていった。

そうこうする間に、この女、ある頃から心細げにつねに泣くようになった。男「普段とはちがう様子にどうしたことか」と思い、「なぜそのように泣くのだ」と問うと、女「心ならずもお別れをしなければならぬこともあるかと思つと悲しくて」と言う。男「今更なぜそのようなことを考えるのだ」と問うと、女「ほかない世の中は、みんなそんなものかも知れませぬ」というので、男は「言つていだけなんだ」と解釈し、「ちよつと出掛けてくる」というと、女はこれまでと同様に用意をして出してやつた。

「お供の者も乗る馬もいつものようにして行くのだから」と思つていたが、二三日は帰れない所だったので、供の者も馬もその夜は留めていたのだが、次の日の夕暮れに、女はちよつと出掛けてくるようにして、そのまま姿をかくしてしまつた。男「明日には帰ろうと思つていたのに、これはどうしたことだ」と思い、いろいろ探しまわつたが、そのまま見つからない。驚き怪しんで、人に馬を借り手急ぎ帰つてみると、女と暮らした家は跡形もなく消えうせている。「これは何ということだ」と驚き、蔵のあつた所へ行つてみると、これもきれいに消えている。尋ねる人もなく途方に暮れていると、女の言つたことが今さらに、思いあわされ

た。男、せんかたなく、昔からの知り合ひのもとに世話になり、しばらく過ごして

みをして二三度になつたが、やがて捕らえられてしまつた。檢非違使で尋問され、男ありのままにこれまでの経緯をものれなく語つたのだつた。

* * *

この話は、非常に不思議な話だ。件の女は妖怪変化の類であるのだろうか。一二日のうちに家も蔵なども跡形もなく撤収してしまふというのは、あり得ない不思議だ。またそれほど多くの財宝や従者たちを引き連れて去つていのに、その後のことはさっぱりうわさにも聞かない。これも不思議だ。また家について言い付けることもないのに、自分の思うままに、従者たちが時間も間違えずに振る舞うというのは、まことに腑に落ちない。その家に二三年女と暮らしていたのだが、男は最後まで「そうだったのか」と納得することはなかつた。また強盗に入ろうと集まつた者たちも、それが誰ということも最後まで全く知らないままであつた。ところがただ一度だけ、盗賊たちが落ち合つた所に、少し離れて立つている者に対して、他の者たちがかしこまつた様子を見せている。これを松明の火影ではのを見ると、男の肌の色にしてはひどく白く美しいもので、頬の作りや顔立ちが、わが妻に似ていて、「そうではないか」と感じたことがあつた。しかしそれも確かなことはわからないままに終わつてしまつた。この話、あまりに不思議なことなので、このように語り伝えられているということだ。

この話は、「今昔物語」の数多い話の中でも、屈指の名作であると思います。この名作を凡庸な現代語に訳すことに忸怩たるものはあるのですが・・・。

それにしても、この女盗賊の不思議なシステム！また男を鞭打つ場面などは、人間心理の不思議な深淵を覗き見させ、濃密な大人の愛の危険な匂いを漂わせています。（しかし冷静に考えてみれば、この鞭打ちは盗賊団に入るための通過儀礼だろうと思われませんが、大人の愛の一つの形としての側面がないとは言いい切れない・・・）

盗賊たちの集合地になっていた船岡山は、高さ四十五メートル程の小山で北大路の南にあり、現在では住宅街の中に島のように浮かんでいます。当時は都のはずれで、さびしい土地であったと思われます。中腹にある建勳神社は信長を祀ったもので、物語からさらに四百年以上経過しなければこの世に存在することはありません。

最後の記者のコメントはきわめて常識的なもの。この話に対して感じる不思議さを、八百年以上後世の我々も共有しているのを感じます。

またこの話は芥川龍之介の「偷盗」の素材になったということですが、この芥川の小説を読んでもみると、構成は全く異なっています。（なお「偷盗」を含め、芥川の多くの作品は「青空文庫」でダウンロードして読むことができます）

坂本一光

◆ 広告の『赤が一番難しい』

私は今でも美しいと読む

（一光）

よもだにもならないかん違い話である。まずは説明が要るだろう。

もう四半世紀も前になる。一晚経つと幾つもの国が次から次へと世界から消えていたことがあった。東西冷戦のさなか西側諸国からソ連の衛星国と呼ばれた東欧諸国である。ロシアのヨーロッパからアジアにまたがる広大さを考えれば、これら諸国が在るのは東欧というよりまさに中欧であるが、これらの国々を東側の国と呼びたかったのだろう。そして遂に一九九一年、最後の仕上げにソ連邦が崩壊した。一晚で国が無くなる（ひっくり返る、変わる）のは歴史の常、身近に目を向けただけでも、およそ百五十年前には二百六十年変わることはない信じられた江戸幕府が倒れた。つい最近では、七十年前に大日本帝国が崩れた。

しかし、東欧諸国およびソ連の崩壊を見ると、東西冷戦に勝ち残ったもう一方の側、西側の目は我が日本を含めて実のんきではあった。その証拠にと言ってよいと思うが、『想像力 資本主義』という広告が現れた。そのバカでかい、「三陽商会」の広告を、私は単身赴任先の松江から戻る深夜に新大阪駅で目にした。

激動の世を外に見ても思う心にあらず

『想像力 資本主義』のコピーを嗤う

（一光）

これが私の感想歌であった。資本主義または自由主義万歳論は一世風靡の勢いであった。どんな国もまかりまちがえば一晚で消える、今見たとおりではないか、何をのんきなことを言っているのだと言え、それは世の中を斜に見る僻み者の根性であるだろうが、私はそう思った。資本主義という体制は永遠に不滅なのか人の不幸に想像力を働かせる能力のない体制は必ず社会にとって不要になる、と。

ソ連崩壊から四年も経たず、阪神・淡路大震災が、変わることないと思っていた町の風景が一晚で一変することを教え、その十六年後に東日本大震災と福島原発事故が止めを刺すようにもう一度それを突き付けたとき、『想像力 資本主義』の言葉は悪魔の言葉として私の頭の中をよぎった。

フクシマの 山荒れ村は 破れても

『想像力 資本主義』にまだ万歳を言う

（一光）

『真の文明は山を荒らさず 川を荒らさず 村を破らず 人を殺さざるべし』というのに（渡良瀬川足尾銅毒問題を闘った田中正造の日記の言葉である。一九二二年）。

さて、『想像力 資本主義』の後か先か、記憶は定かではないがそのころに『赤が一番美しい』の広告に出合った。遭遇し

たのはこれも松江から帰る深夜、京橋駅

で乗り換えた京阪電車の中である。驚いたことにどの車両もすべての吊り広告が

これで（広告の貸し切り）、『赤が一番美しい』『赤が一番美しい』『赤が一番美しい』・・・と大書されていた。異様な

光景で、すごい広告が出たと思った。東欧諸国とソ連が崩壊し、社会主義は死んだと上も下もそう思い、論壇もそう宣言するようになると、悪魔の言葉『赤が一番美しい』を何の遠慮もなく企業も言えるようになるのだ、と私はまるで自分が表現の自由を得たかのように妙に感心し、首をあっち向けこっち向け何度も広告に目をやった。そして、何度目かに目をむいた。よく見よ、何のことはない、『赤が一番難しい』と書いてあるではないか。電車は深夜でもほぼ満員、一番近くの吊り広告に近づきよく見上げよく読んだ。間違いない、『赤が一番難しい』。何のこっちゃ。広告は、これまで再現が一番難しかった赤色を最高に美しく再現することになが社は成功したと高らかに告げる、ナショナルの新型ビデオデッキの宣伝広告だった。それを確かめたとき、笑いたくなるほど悲しくなった。ひとつは私の思い込みの激しさに。もう一つは、どう考えてもインパクトはこつちが上だと思いう『赤が一番美しい』をこの期に及んでもやはりなお言えぬ資本主義社会の不幸に（これも私の思い込みか）。

以下は蛇足である。これを契機に、私は一つの遠慮を辞めた。マルクスやエン

富さに舌を巻いた(目をむいた)と言うべき

か)。文献は、公的統計データから、経済学文献、シエークスピアや聖書に及んでいた。化学者のはしくれとしてはそこまで読みこんだ文献を付けた論文が一篇でもあるかと恥ずかしくなったものである。資本論の文献の付け方は、マルクスの科学的態度を示すとともに、その教養の底知れぬ深さの表れだと私には思えた。

やがて二十一世紀を迎えようとしたとき、それを象徴するような出来事があった。一九九九年、あと一年で二〇世紀も終わり次の千年(ミレニアムというらしい)が始まるというときに、英国のBBC放送が国内外の視聴者に対してあるアンケート調査をした。「過去千年間で最も偉大な思想家は誰だと思うか」というものである。驚くべし、第一位は圧倒的な強さでカール・マルクス。以下、アインシュタイン、ニュートン、ダーウィンと続いたという。カール・マルクスの唱えたことはそれほどに常識化した。マルクスと回答した人たちが彼の思想の共鳴者や支持者でないことは当然であるが、彼らはマルクスの主張が常識になったことを知っていたのである。私は回答者の教養の深さを思った。同じ調査を日本で行えばどんな結果になるだろうか。日本の大学生ならどうだろうか。私はどうか、あなたはどうか、と思った。(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

哲学屋のつづき 10

現代は近代の終わりの始まり？

祖蔵哲

先月はドイツ観念論の大御所カントが近代思想を確立させたというところまで話をしました。近代とは、人類誕生以来、そもそも神の領域であつ『時間』と『空間』を人間のものにし始めた時代である

こと、そしてカントはもともと人間にその資格が与えられていたのだという根拠を示し、またその限界にも言及しました。ところがさらに人間が神の領域を取り込んだものがあります。それが「知」です。知識は本来、自然の摂理であり、神の計らいとされていたのですが、これも人間が神から略奪しました。さらに知識革命である印刷技術によって時空を超えて拡大していったのです。この『時間』『空間』『知』の三つを支配して今頂点にある人間が生存している時代が現代です。

さて、単なる哲学屋が今までも大上

段を振りかざして専門分野以外にも大胆に入り込んだ場面はこのコラムでも過去何度かありましたが、今回は経済分野に触れることをお許しください。最近、「資本主義」を扱う書籍が増えつつあるのが気になっておりました。日本経済のバブルがはじけていわゆる「失われた十年」を経て以来、景気低迷、デフレ不況、ニート、派遣労働問題などで昔の小説「蟹工船」がブームになったり「新自由主義」

という言葉などから資本主義の問題が世間で取り上げられるようになりました。

つい最近ではフランスから気鋭の経済学者トマ・ピケッティ氏が来日し彼の「二十一世紀の資本論」はベストセラーになっています。また日本の経済学者の水野和夫氏のユニークな資本主義分析の本も広く読まれています。両者に共通するのは資本主義の限界に関することです。

トリクルダウン理論という経済用語があります。トリクルとはぼたぼたと滴り落ちるといふ英語です。すなわち富裕層が富めば経済活動が活発になりその富が貧しいものにも浸透して豊かになるという理屈。富の再配分が起こりうるという理論です。しかしこれが真実ではないとデータで証明したのがピケッティ氏でした。水野氏は「富」そのものの限界を指摘され、物質的のみならず人的も含めた地球資源の限界から、富の再配分は起こりようがないと結論づけておられます。

さて、経済活動でみると人類の原始時代が共産主義か単なる共同体生活かは見がわかれるところですが、しかし人間が定住し始め、作物などの余剰生産や蓄積が可能になると生産物の所有よりも生産手段の所有が決定的な貧富の差をもたらすこととなります。生産手段とは土地であり労働力でありエネルギーです。所有という概念がいつからできたのか。本来、自然物は全て神のものであったはずで、聖書だけでなく、多くの世界の創造

ゲルスなどのいわゆる社会主義の論文著作を読んでみると、勝手な解釈であれ、深い意味があると思える記述に出合うことがある。もちろん、断片を取り出しても仕方ないのであるが、九〇年代以前にはそれを話題にすることも憚れる雰囲気があった。大学の教室においてはもちろん、同僚との会話等においてもである。しかし、もうそれは終わった、なにしろソ連は崩壊したし、世界中が認めるおろりマルクスは死んだし、レーニンの銅像は引き倒されたし、社会主義は死んだのだから。何の遠慮があるかというほとんど居直りであるが、そう思うことにし一部は実行にも移した。時折、私のこの寄稿にも見るとおりである。ついでに言えば、社会主義は死んだと言われる大きな根拠の一つは、それが死んだと言う人たちは認めたくないかもしれないが、歴史の事実として、初めは非常識な社会主義的主張と思われたことの半ばが社会の常識と化したからであろう。それが資本側の暖かい温情の結果だとは私は到底思わないが。

著作で一番感心したのは資本論を読んだ時である。単身赴任の松江・大阪行き帰りの電車の中で一年半かけて読んだ。軽い版をと新書版全十三冊を求めた。読んだといつても読み飛ばしたに過ぎないのであるが、労働とか商品とか価値とか、賃金・利潤・資本とか、推理小説を読むような興奮を感じる場面があった。それより何より、文献の量質ともにわたる豊

神話でも神といわれる超人格が世界を造っています。では人間はいかにそれを所有できるのか、様々な根拠づけがされています。ひとつ、前回登場したイギリス

経験論のロックの所有論を見てみましょう。彼はそもそも疑えない真実は経験であるとしましたが、この経験の意味のなかには努力してということが含まれています。そしてこの努力して獲得したものは所有する資格をもつと言っています。

まあ、その程度というものはつきりわかりませんが、現在の知的所有権なんかその始めでしょうか。さらにロックは物の所有などについてもこれを認めています。ただし次の二点を除くとしていません。一つ目は他者に十分なものが残されていない場合と自分が所有したものが無駄になっている場合です。後者は獲得したものを腐らしてしまう場合なので

よう。前者はいま地球で問題になっている資源の有限性のことに当てはまるのかもしれない。いずれにせよこの所有という概念から資本主義経済システムが生まれました。しかしこの単なる所有だけでこの経済活動は成立しません。なぜなら資本主義というのは資本が自己増殖しなければならぬからです。資本すなわち生産物手段が自己増殖し利益を生むことこれが資本主義の本質です。どのよう

に資本が自己増殖してゆくのか。マルクスに言わせれば、それは労働力であるかもしれないませんが、それはエネルギーと同

じで生産物手段そのものです。そうではなくて、自己増殖の契機は『時間』と『空間』です。

そもそも「利子」は貨幣が使用されるようになってから定められた制度ですが、それは最初禁止されていました。不労所得を防止するという意図があったらしいのです。旧約聖書でも利子を禁止していますが、異教徒からは取っても良いと

られていたらしいのです。ヴェニス商人に見られるユダヤ人の利子はキリスト教からみれば彼らは異教徒だったからでしょう。お互いに異教徒であるから利子をとつてもよいという大変都合のよい解釈です。イスラム教も利子は厳格に禁止しています。ではなぜイスラム銀行がある

のとか思われるし、そもそも教祖モハメッドは商人、どうして商売をしてきたのか不思議です。しかし彼らは利子とは呼ばずに利潤などと称し、うまく宗教解釈している様子です。そもそも利子というのは不労所得と同時に本来神のものである『時間』に値段をつけるという越権行為です。この『時間』を神のものから奪

い取って利益を得るのが資本主義の一つ目の方法であったのです。二つ目は『空間』です。これは地理的に物を移動させることによって利益を得る仕組みです。これは必ず利益享受地である「中心」と搾取地である「周辺」が必要となります。経済活動の基本原則は「安く仕入れて高く売る」です。この地理的『空間』をこ

れも神のものから人間のものにして生き延びてきたのが近代の人間です。さらに現代人はこの時間と空間でさえ、コンピュータなどの情報科学により高度な支配を可能にできています。二十四時間

行われている仮想空間での現在の金融取引はもう人間自身の意志すら越え神に對抗すべき領域での支配争いの様相です。近代社会では『時間』は進歩を『空間』は均一を目指しています。しかしこれは

果たして可能なのでしょうか。地球資源の限界は進歩にとって大きな問題であるし、空間の均一化すなわち富の再配分はそもそも資本主義の生存条件である「中心」と「周辺」の存在と矛盾します。地球全体をグローバル経済により覆うと

「周辺」のフロンティアがなくなり、そこで新たに資本は「中心」の中に「周辺」をつくるのです。これが新たな「格差」なのですが、このような状態もいつまで続けること出来るのでしょうか。本来、神のものである『知』をいったん神の元に返して、再度、最初から考え直して

みるのが現代に生きる人間にとって今必要ではないかと思えます。哲学ではカント以後、人間の存在を探索する実存主義などが出てきましたがこのような問題にとつては無効です。新しい哲学の出現が待たれるところです。



花盗人のうらおもて

大江雉寛

花を盗む者を「花盗人」といい、言葉が仄めかすところは、行為は咎められるものでも風流を解する者……現在、一般に用いられている辞書の範囲ならこのあたりの理解で問題はない。だが「花盗人」との表題をもつ狂言の台本にあたってみると、そう簡単には収まらない、というのは表面的な字義はさておき、含むところが確認できるのは古態の「花盗人」だけで、近世になってから流行した狂言では多くのアレンジが加わり、辞書が説明するような単純な解釈は難しいからである。前回までの話をまとめると、おおよそんな具合だが、そこから敷衍させて、他にたくさん類例が見られるケースと同様、「花盗人」という言葉も背景の分析が無視されたまま、イメージでのみ流布したのではないかということにも言い及んだつもりである。

その流れを承けて、今回はイメージ世界でのさらなる偏向を追ってみる。たとえば次の詩などは格好の素材だろう。

まだ触れないで

その慄ふるえる指先は

花盗人の甘い躊躇ためらい

触れてもいい

この深い胸の奥にまで

届く自信があるのならば

「聖少女領域」(詞・宝野アリカ、二〇〇五年)という歌の一節のだが、引用箇所以外にも「囁ささやいてパパより優しいテノールで」や「水晶の星空は遠すぎるの」など、迂闊に聞こうものなら背中いっぱいにはじんましんが広がってしまうフレーズが並ぶ。しかし、ここで少し立ち止まってみる。タイトルの「聖少女領域」、あるいは「花盗人」がこの歌詞に溶け込みきっているということ、そのあたりに思いを巡らせれば、ここで用いられているのは意図的に選ばれた言葉ばかりなのではないだろうか。「涙」だの「酒」だの「雪」だのと並べておけばそれだけで演歌のサビが出来上がるのと同じように、あるいは「遺憾に思う」や「鋭意検討中」というだけで国会答弁となるのと同じようである。要するに特定のジャンルには、その世界でよく使われるとともにその世界を象徴するキーワードがあるということである。観賞用の植物を持ち主に無断で盗み取る者という字義を越えて、現代の「花盗人」は特有の立ち位置を獲得しているのである。

切なものをあげるわ」と歌って物議を醸したことがあったが、それと重なる世界である。問題は、「聖少女領域」の中では、そういったイメージで並べられた単語群に「花盗人」がしつくり落ち着いていることである。

古典和歌を紐解くと、女性を花に喩えることは珍しくはないし、性的なニュアンスを漂わせることも縷々見受けられる。それに「花盗人」に絞っても、前々回に見たように、敦道親王と和泉式部のエピソードがある。だがそうした文脈で「花盗人」が何度も何度も繰り返し使われてきたのかというと、その形跡は窺えない。むしろ一般的な辞書が説明するところの狂言「花盗人」に即した捉え方が主流になる。

そんななか、大きな転換点となったように思うのが森鷗外が訳したゲーテの「ファウスト」(一九一三年)である。ファウスト博士と悪魔メフィストフェレスが活躍するお馴染みの劇詩だが、その第一部の最後あたりにメフィストフェレスがギターを手に、ヒロインの兄に向かって歌を口ずさむ。

気をお附つけ。

済んでしまえば

おさらばよ。

気の毒な、気の毒な娘達。

自分の体が大事なら、

花盗人に



油断すな、指環を嵌めて貰うまで。

ヒロインの娘を誘惑の毒牙にかけたあとで「結婚するまでは純潔を守りなさい」とのお説教を垂れるわけだから、露骨な嫌味であり、悪魔らしい嘲笑である。ドイツ語はよくわからないが、原文のこの箇所には泥棒を意味する「Dieb」とあるだけらしい。とすれば、この単語に「花盗人」を宛てたのは鷗外の解釈ということになる。まったくもって超訳と呼んでよさそうなこの離れ業によって、「花盗人」周辺に見え隠れしていたエロチックなニュアンスが陽のあたる場所に引っ張り出されたという、果たして言い過ぎだろうか。(続)

MEMO

道のりは遠い

突然、友だちが言った。
「うちの孫は何を考えているのやろか。」
「なんで？」
「三十才をすぎているのにまだ女の子がないのやで。『おばあちゃんはこの人と結婚するんやと、連れて帰って来てくれるかと思って、この正月は楽しみにしてたんや』って、バアの立場でいたくないけど、思い切って言ったんやで。なのに返事は『そないに簡単なんやないわ。ウツウ：』と笑っただけや。わしらの娘のころは、二十才をすぎたら、親が恥をしたので他人さんに頼んだもんや。いまの親は何を考えてんのやろな」

そう話しかけられ、答えを待っている友に思う、私も同じと。三十才すぎた孫娘の息子夫婦の親だもの。「結婚は判断力の欠如」「離婚は忍耐力の欠如」「再婚は記憶力の欠如」と。「不幸な結婚より幸せな離婚」という記事を見て、余計な口ははさむまいと。

問題は結婚に至らない人の多さであるう。結婚情報サービス会社オーナーネットが、新成人六百人に恋愛観などを聞いたところ、半数が今までに一人も交際相手がいらないと答えた。今どきの若い人達は出世欲はあまり

なくて、仕事も恋愛も淡泊、大切なのは趣味などの自分の時間が惜しいという。「恋する力は生きる力だ」と思うと力説して甥に話したら、そんなに言うのなら、「小母はんが見合いましたら、まだ元氣あるで」ギャフン。

くもりのち晴れ

朝ドラ、NHK朝のドラマ「マッサン」の主題歌は、麦穂の波が風に吹かれ豊かな実りの時期を思わせる。身についたものか、画面に映る大麦、小麦かなアとしばし見とれる。

中島みゆきさんの音楽「マッサン」も諦めずに前に進む日本人の応援歌だろう。番組はいよいよ核心に、念願の北海道余市に工場を持ち、国産のウイスキーの道へと。

最初の山崎工場は秀吉、光秀の天下分け目の合戦の地。天王山のふもとに位置する。山崎工場のウイスキー見学に参加は未だ経験ないけれど、機会があればぜひ行ってみたい。

サントリーとニッカ、二大ウイスキー会社の物語。創業者鳥井信次郎は、番組では「大将」と呼ばれる。彼が常に口にした「やってみなはれ」。その進取の精神は、日本人の挑戦する心に老若男女を問わず、心に生き続けることであるう。蔭にかくれて支えあった夫婦愛も忘れてはならない。

視野はまだ狭い

この五十年で、社会は大きく変わった。女性が大臣になったり、結婚、出産しても働き続ける女性が増えたりと、女性の社会参加が相当進んできた。でも、ちよつと中身が足りないかと思うことがある。

一人の人間として活動し、活躍するために年令関係なく、もつと勉強して社会を広く見ていく姿勢が足りない。女性の視野はまだ狭い。口の軽い心ない知人の反対意見など、嫌なものが入り込んできても気にしない。とかく個人的な感情に左右されやすいのだ。もつと「腹を大きく持つ」ことが大切。長寿を保つための特効薬になる。

実家へ行って思うこと

子供の数が減り全く活気がない。道路わきに自家用車がブーと通るだけ。中身は誰と見ると、ニコツと笑って頭をさげておられるが、誰かさっぱりわからない。昔は三代代、四世代一緒に暮らしていたが、今は老夫婦二人だけという家族構成。住民が減り地域の行事もどうにか続いているという。個人商店がなくなり、買い物は車で一週間分買うという。車社会といえどもそれまでだが、買い物に行けず困っている人がいるのに、そのままなのか。昔、食料品を含めて、何でも売っていた

た店が完全に閉まり、住む人もなく大きな家そのまま、バス停でみんな便利にしていたのだから、村の人達はこの家を何とか生かして利用することを考えないのか。

ひまな老人をもつと上手に利用して片隅にソファア、テーブル用品を持ち寄ってセルフサービスでお茶でも、来た人がくつろいで会話をしたりする場を考えたらと。

弟夫婦に話したら、「自分たちの生活でいっばいだから、そんな奇特な考えを持った人は田舎には居らん」一言で突き飛ばされた。嫁して七十年たち、息切れしている自分の姿、何が出来るのか、いま一度考えたい。

俳句

土田 裕



草青むふるさと離れ五十年
張り紙に閉店の謝辞春寒し
空の青薄めて辛夷咲きにけり
職引きて時間長者の春愁ひ
老木の瘤にさくら二三輪